

# Between Cinema & Geology

by ロッキー鈴木

私の周囲、とくに小学生以下の子を持つ親の間では、日本映画の興行成績を塗り変え、驚異のロングランを続ける宮崎駿監督のスタジオ・ジブリ作品「千と千尋の神隠し」を見ていない人を探すのが難しくなっている。

しかし、映画についての全ての報道が手放しで「千と千尋」を礼賛している現在の状況は異様だ。映画批評が宮崎作品はすべて正しいという「ジブリ原理主義」ではちょっと困る。

確かに「千と千尋」は愛すべき作品であるし、日本製アニメーション、あるいはスタジオ・ジブリ作品の佳作のひとつであると思う。しかし、伝えられる数字にふさわしい大傑作か、というと、そうでもないのも事実である。

いま「千と千尋」の批判をするのはタリバンを擁護するのと同種の心細さがあるが、せめて本誌読者の方には、私が嫌われ役を引き受けようと思う。

一応、ストーリーを説明したい。

両親ともどもある町に自家用車で引っ越してきた小学5年生の千尋は無理な近道をしようとした父親のせいで道に迷う。さらに両親は千尋の制止も聞かず怪しいトンネルに入っていく、それを追った千尋ともども異界に迷いこむ。炉端焼き屋風の、店員もいない怪しい店に料理が並んでいるのを見た両親は、これまた千尋の制止も聞かずにががつと貪り食い、ついには豚になってしまう。その頃にはそこいら中がもののけだらけであることが知れるが、後にその異界こそ八百万の神々のリゾート地、いや遊廓街だということが判明する(興行戦略上の理由で遊廓につきものの♡♡♡シーンはカットされている)。帰る方法もわからない千尋は、止むを得ず夕霧楼…じゃない油屋という遊廓(ヘルスセンター?)のサンスケであるハク

の手引きで湯女に身を落とし、足抜けの機会をうかがう。「千」という源氏名を与えられた千尋を様々な試練が襲うが、体当たりでこれらをクリアし、ついに湯女ナンバーワンまで上り詰め、実は良い所のボンボンならぬ川の化身だったハクに、もうこんな所に来るんじゃないよと見送られ、現世に生還する。その際、あの罰当たりな両親までも救い出したのは、まさに湯女の鑑であった。目出度し目出度し。

という吉原炎上ジュニア版(R指定なし)みたいなお話が、なぜこれほどまでに受けたか。各誌各紙の評論を要約すると「初めは生きる力を持っていなかった千尋が、逆境の中でも自分を失わず、生き抜く力を身につけ、人間として大きく成長していくストーリー」が観客の感動を呼んでいるのだ、とのこと。

しかし、予備知識なくこの映画を見ると、冒頭での千尋は、格別生きる力を持たない小学生ではなく、むしろごく標準的な小学生として描かれている。少々無気力な点や社会に対する無関心は、何も千尋に固有のものではない。だからといって現代日本の小学生一般が生きる力を失っている、などと思うのは、旧世紀人の思い上がりであろう。

それでもほとんどの観客は千尋が生きる力を持っていないことを前提に据え、この映画を観る。なぜか。それは映画以外のメディア、特にテレビが、ストーリーの説明と称して大量の情報を茶の間に流し、映画鑑賞前に「生きる力を持たない千尋の成長物語」という先入観を徹底的に叩き込み、狂牛病同様に観客の脳を汚染しているからである。

さて、ほとんどの人間は逆境に放りこまれると、それが絶望的な状況であればあるほど、懸命に生き延びようとする。現に、地球上のそれこ

そいたるところに、不条理な逆境が生み出され、圧倒的な力で人間の尊厳、どこか存在そのものを奪い続けているのを、同じテレビが見せつけている。

「千と千尋」のストーリー上の不自然さは、千尋に降りかかる災難が、そこそこ頑張るとクリアできる程度にコントロールされているように思える点だ。また、千尋は与えられた課題をこなすだけで、積極的に不条理な運命と対決しようとしているわけではない。これらを評して、テレビゲームのようだ、といった識者もいた。その点で、頑固な私は心から千尋の行動に共感することはできなかった。

「千と千尋」の大ヒットは、映画ファンを大動員した結果というより、普段映画をほとんど見ない層が、テレビ報道に煽られて映画館につめかけた結果、といえるだろう。もちろんファン層の拡大は日本映画にとっても喜ぶべきことだろうが、この観客動員数は従来の映画との比較ではなく、テレビの視聴率との比較で考えた方がいい。そしてその背景には、マスコミの「ほめて安心スタジオ・ジブリ」「寄らばジブリの陰」ジブリ原理主義への信仰が色濃くある。

誤解のないようにしておくが、私は実は宮崎駿ファンである。私の宮崎ベスト3は3.魔女の宅急便(89年)2.風の谷のナウシカ(84年)1.紅の豚(92年)である。3はパン屋が舞台なのが気に入った(なんじゃい)。2は設定を支える自然観がすばらしい。1は宮崎作品唯一のオヤジ向けハードボイルドだ。当然、興行的にはジブリ作品中最低ランク。でも、主役のポルコ・ロッソは同じ人間豚でも千尋の両親とは比較にならぬ洪さだ(ところで「千と千尋」で、なぜ沢口靖子は人間的魅力がひとつもない、どーしようもない端役・母豚の声を引き受けたのか?)

女優としては格下の夏木マリがメインキャストの「湯婆&銭婆」というオイシイ役をやっているのに。従来の芸能界の常識も、ジブリ原理主義には通用しないようだ。

これらの映画に比べると、大ヒット作「もののけ姫」は完成度の点でかなり落ちると思う。映像技術は素晴らしいが、なんといっても終盤あの冗長さには耐えられない(なぜモロとオコトヌシの対決をクライマックスとして話をまとめず、宇宙船艦ヤマトみたいなスペクタクルを繰り広げるのか?)

多くのファン同様、私が宮崎駿の手がけた作品で格別に肩入れしているのは、はるかジブリ設立以前の「ルパン三世・カリオストロの城」(80年)である。スマートなストーリー、記憶に残る台詞、人物の造形など、この作品には映画の魅力、映画の楽しさがあふれている。アニメ界にも映画のプロ中のプロがいる、ということを示した記念碑だ。今のジブリの作画技術とは比べようもないくらい旧式だが、それだけに人を感動させるのは技巧ではない、ということを見せてくれるのである。音楽もいい。最近のジブリ作品に共通するNHK教育テレビ風の似非教養主義的テーマ歌とは大違いだ。「アニメ界の七人の侍」という称号を送りたい。

(編集人付記:鈴木氏がNo.3にあげていた「魔女の宅急便」原作本のイラストを書いておられる林明子氏は、もともと地図を書かれていたということで、童話のさし絵も非常に情緻に、私の下手なルートマップなんかお話にならないくらい、空間を正確にとらえて表現される方です。その代表作「はじめてのおつかい」などをぜひ一度ごらんになることをおすすめします。)